

初期仏教教団に於ける頭陀行者の一群について

木 川 敏 雄

初期仏教教団に於ける頭陀行者が、教団内においてどのような機能を果たしていたかについて本稿は考察を行うものである。

仏教教団内の頭陀行者として、特に提婆と大迦葉とを挙げることができ、この両者の行動と他の頭陀行者の行動について明らかにすることにした。

提婆の破僧が上座・大衆両部の文献に記載されていることは、釈尊の在世中に、歴史的な事件として起こったもので、その破僧の方便に使用した五法に、彼の本来の姿があり、律上では、彼が墮地獄したことになっているが、事実としては『法顯伝』、『大唐西域記』に記されているように、提婆の教団は存在していたのである。

では、『四分律』第四・四十六卷、『五分律』第三・二十五卷、『十誦律』第四・三十六―三十七卷、『Vinayapitaka』vol. III、『Cullavagga』Ⅲ、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』第九―二十卷等の諸律の破僧健度を通して、提婆が破僧したことを

について考察することしよう。

提婆は五法について『十誦律』第三十六卷に「過去の諸仏が聴した。」ことを強調し、更に、涅槃も得られるとすることから、彼が五法に対して自信を持っていたことがわかるのである。

では、提婆が持っていた自信が何を根拠としていたのだろうか。

『五分律』第二十五卷には、提婆が破僧について和修達に話し、その賛成を得てから後に破僧をしている。このことから、提婆には教団外に彼の支持者がいたのであり、また教団内にも三聞達多等の追従者がいたのである。

なお、仏陀時代には耆那教等に類する沙門を教団主とする出家教団の相互交渉は多く、遊行中、各宗の出家が休息処等で相会し、談じ合ったと、佐藤密雄博士は『原始仏教教団の研究』一二三頁に述べられている。

これらのことから、提婆には教団内外に支持者がおり、恐

らく他派との相会によつて、釈尊の教団の比丘達の生活に対して批判するようになり、その批判的考えが、「五法」となつたのであろう。

釈尊の教団で行なわれている比丘達の生活についての批判ということから、最初期の仏教の生活規定との関りを見ることによつて、明らかにすることができようであらう。

出家生活の原則は四依（糞掃衣・乞食・樹下坐・腐爛菓の生活）であり、入団の際に伝えられるが、それは形式で、実際の比丘の生活は長利（施衣・請食・精舎・藥）であつた。

なお、佐藤密雄博士は『原始仏教教団の研究』二二三頁に、四依を仏陀の創設とはしないで、出家一般の生活原則であつて、出家戒に入るものであり、長利として定めたものは仏教独自に認めたものであらうとされている。

また、提婆の五法は各律ともわずかな違いがあることから、分裂以前の上座部において五法ができあがつていなかったことによるものであろう。提婆の主張は乞食・不食魚肉・糞掃衣・露坐（樹下坐）を基本とし、彼の五法は四依をさらに厳しくしたものであろう。

つまり、釈尊は教団が長利に見られる施衣・請食・藥・住精舎を認める生活をなしていたので、提婆は出家本来の生活から離れていたことに対して批判し、異議を唱えたのである。

提婆は出家の理想とした生活を五法に示すと共に、それに自信を持つていたのである。

続いて、大迦葉について考察することにしよう。大迦葉が婆羅門の子として学生期を過ごした後の家住期と出家の前後について検討することにした。

『仏本行集經』第四十六巻と『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』第一巻には大迦葉の出家の原因となつた事件に関する伝承が記されているのである。

両資料には耕作させている時に起こつた事柄、つまり、農夫を苦しめ、牛を困厄させ、田地の虫を殺している等の伝承が記されているのである。これらの事柄は大迦葉にとつて、自己の生活の基礎が「殺生」によつて成立していることを知らしめたのである。このことはとりもなおさず『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』に記されている「大迦葉が家事を知る。」ということに外ならないのである。なお、出家した後の行動について、永崎亮寛氏は『印仏研』第二十七巻第二号一七八—一七九頁に、大迦葉が外道の修行をしていたとされている。

大迦葉は仏教教団に入団してからは、『Thera-Gāthā』G1051—1060に記されているような生活であり、まさに四依の生活者であつた。

では、大迦葉が四依の生活者に成り得た要因は何であつた

かを探ることにしよう。

大迦葉にとつて、四依の生活は彼が出家時に求めていた梵行を基本的に支えるものと考えたのではなからうか。つまり、四依は仏教教団の最初期の生活であり、一般出家戒に通ずるものであつたので、四依の生活態度を保つことこそ、梵行を支えるものであると大迦葉は考えたに違いない。

まさに、『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』に記されている大迦葉が出家を志ざした時に言つた人生觀と四依とは一致するのである。

所食無過一昇飯 眠臥唯須一小床

兩張氈布足遮身 自外並是愚癡物

この伝承から理解できることは、帰仏以前の考え方と行動を、帰仏後の環境内に持ち込み、それをその環境内の状況に応じさせたのである。このことを容易にさせたのは四依が一般の出家戒に通ずるものを包含していたことによるものである。

大迦葉が教団内で自他共に認める頭陀行者となつてからの行動を求めることにしよう。

大迦葉は多聞を競つている二比丘を釈尊に告発している伝承が『S・N, Kassapa-Samyutta』第六、『雜阿含經』第四十一卷、『別訳雜阿含經』第六卷に記されており、多少の相違はあるが、ほぼ一致した内容である。

このことから大迦葉は頭陀行者として認められていたの

初期仏教教団に於ける頭陀行者の一群について（木 川）

で、他の比丘達の行動に対して鋭い批判ができたのである。

なお、大迦葉は年老いてからも阿蘭若・乞食・糞掃衣の生活をしていたのである。やがて、釈尊が入滅されると、法と律の散逸を防ぐために、王舎城結集で大迦葉は主宰したのであつた。

次に、提婆や大迦葉以外の頭陀行者の行動を見ることにしたい。

『十誦律』第五卷には、釈尊が四月燕坐の時、一送食と布施以外には諸比丘と会わないことを告げられたが、優波斯那はその最中、釈尊にお会いすることができたのである。というのは、阿練兒、著糞掃衣の頭陀比丘であれば随意に来ることを釈尊は許されたからであつた。つまり、頭陀行者が尊敬される存在だつたことをこの伝承は示しているのである。

以上の考察から、提婆と大迦葉とその他の頭陀行者の行動について論究したので、教団内での彼らが果した機能について述べよう。

仏教教団に於ける頭陀行者は常に四依に近い頭陀行を行い、そのことによつて尊敬される比丘となり、それ故に、教団内の乱れに対して厳しく批判をすることができ、また、それが受け入れられる存在であつたのである。

（寺院住職）